日銀の視点

日銀水戸事務所長　安田 武

多様であるべき「標準」

休日の出来事。高校生の次男が初めて異性とデートに行きました。どこへ行き、なにを話すのか。初めてのことには期待とともに不安がつきまとうものです。ネットの口コミ情報や人工知能（ＡＩ）も駆使しながら、大きく外すことのない標準的なプランを作成し、当日のデートに臨んだに違いないことでしょう。

「多様性の科学」（ディスカヴァー・トゥエンティワン、マシュー・サイド著）という本の中で、興味深い逸話が紹介されています。１９４０年代末の米空軍では、航空機事故が多発していました。機器の性能や操縦士の技量に問題はない。そこで、20年前に標準化されたコックピットの仕様に関心が集まりました。過去の操縦士の体格の平均値を基準に設計された仕様は、現在の大きくなった操縦士の体格に合っていないのではないかという仮説です。

しかし、そもそも平均値にピタリと当てはまる操縦士は実在するのでしょうか。実際に４千人超の操縦士を確認したところ、そんな体格の操縦士は20年前からいなかったのです。問題の本質は、操縦士の体格が大きくなったことではなく、平均値を基にした画一のコックピットを標準にして、本来多様であるはずの人間の体に無理やり当てはめていたことにあったわけです。

日常生活は標準化によって支えられています。例えば、服を選ぶ時に標準のサイズがあれば、オーダーメードよりも選択の手間を省けて値段も安く抑えられます。居酒屋のメニュー、旅行のパック商品も同様です。標準化の全てを否定することは合理的とはいえません。一方で、コックピットの事例は、われわれが看過しがちな標準という名の落とし穴に気付かせてくれます。

「標準」のあり方自体、多様であってしかるべきです。

われわれは、無意識のうちに自身の選択と決断への不安から実体のない平均像や固定観念に基づく理想像を他人に当てはめてしまうものです。皆さんも職場の部下や自分の家族、身近な人との関わりにおいて、思い当たる節はないでしょうか。時にはわが身を振り返って、そこに実在する〝誰か〟を具体的にイメージできているかどうか、自問してみることも大切です。

米空軍ではその後、操縦士が自分の体格を基に座高やレバーの位置等を動かせるようコックピットの仕様を変更することで安全性を向上させました。実在する〝誰か〟に目を向けた結果です。では、異性とのデートのプランはどうあるべきでしょうか。柳の下にいつも泥鰌（どじょう）はいません。次男には、経験を重ねていく中で、自分なりの答えを探り当ててもらいたいものです。